

## 文化遺産を機能化する NPO セクター

赤塚 次郎

愛知県の旧尾張国には丹羽郡、中島郡、そして愛知県の語源になった愛知（あゆち）郡、こうした郡がありまして、丹羽郡もその一つです。その「にわ」の元々の字が「邇波」と書きまして、その語源から、今理事長をしている NPO に「NPO 法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク」という名前をつけました。ここには木曾三川という木曾・長良・揖斐という三つの大河が流れていて、そこに流れ込む濃尾平野という日本列島の中でも屈指の大平野があります。その木曾川水系の扇状地が犬山扇状地と呼ばれています。その扇状地自体を「邇波の里」と昔は呼んでいたと思います。そこで旧の郡、邇波郡を中心として、文化遺産を使いながら、みんなで楽しく文化遺産を活用した取り組みを行おうとして、この名前をつけさせていただきました。しかし実は不都合もありまして、例えばいろんな書類書く時に、漢字が出ないとか読めないとか色々お叱りを受けていて、名前をつけるときはもっとシンプルな方が良かったかな、と思っています。ただ略称がありまして、「ニワ里ねっと」と呼んでいて、こちらを活用していただければと思います。

私の現在の表の顔は愛知県の埋蔵文化財センターという、愛知県の遺跡の発掘調査を担当する部署ですが、そこで 30 年間近く、発掘調査をしてきました。そしてもう二ヶ月くらいで、「さよなら、まいぶん」となる予定です。その瞬間が待ち遠しいです。今日はこの二つの顔を前提にして、四つの話をしたいと思っています。まず一つは、私が埋蔵文化財センターでやり残した仕事、ここ 10 年、15 年ぐらい、岡安さんと一緒にやってきたのは、考古学資料、埋文のデータを如何に標準化するか、ということを真剣に取り組んできました。その話をします。結論を申しあげますと、残念ながら失敗しております。次に二つ目は、失敗を前提にしたわけではないのですが、どうしてこの NPO を立ち上げたのか、という話をします。そして三つ目の話は、埋蔵文化財センターというのが岐路に立っているのはみなさんご存知だと思います。事業量が減っている。じゃあ次どうするのかと。右肩上がりの事業量が見込めた高度成長期、その開発処理機関として埋蔵文化財センターが作られたのは事実です。それが終わってし

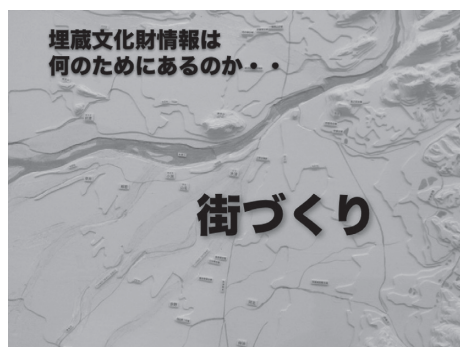
まった。現在、次の段階に向かうべきところが、文化庁を含め、埋蔵文化財センターを次なるこういう方向に移行すべきだ、あるいは廃止すべきだと打ち出さなければいけなかったと思いますが、それをやらずにズルズルきてしまった。生きるべき術をすべて、地域の埋蔵文化財センター担当者に丸投げされている状態で、各地域の埋蔵文化財センターの皆さん、本当に苦勞されていると思います。事業量は減少、担当者は高齢化、だが人は雇えない。今までのような調査を主体にだけやっていたら、食べていけない。じゃあ普及活動でもやりましょうかといって、突然普及啓発活動が表面化した。どうなんでしょうか。標準化もできてない雑多な資料を基に、何をしようとしているのかよくわかりません。その場つなぎの動きとしか見えてこない。最後の四つ目は、以上の紆余曲折を踏まえて、夢を見るまとめのようなお話で、NPO セクターの役割を少しお話ししたいです。

## 考古学情報の標準化

では第一幕は考古学情報の標準化、というお話をしたいと思います。考古学の情報、埋蔵文化財センターの情報は膨大で多様な資料群の寄せ集めです。どんどん増えています。それを標準化したらどうか、というのは昔から議論されていますが、実際にはうまくできていません。多くの先輩たちがこれに挑んできましたが、より良い成果がほとんど上がっていないのが現状だと思います。

そこで我々がやってきたことは単純です。全ての調査成果をデジタル化しましょうね。文化庁でも発掘調査というのは遺跡現場から、整理作業をやって報告書を出すまでを「発掘調査」と言っていると思います。その発掘調査の現場から、整理作業をやって、報告書までのワークフローを全て、一貫してデジタル化しましょうね、というのが我々の意見・主張です。実に単純です。だが、まずここで抵抗がありました。そもそもデジタルなんていやだね、という話がすぐに飛び出てくる。こうした不毛な議論の中で気付いたのは、いろいろな方々

とお話すると、一つの定点が見えてきます。それは、各地域の埋蔵文化財センター、あるいは大学、すべてそれぞれお作法がございまして、調査方法の全てに固有のお作法があるのです。まさに個々・地区個別単位で、まさにばらばら。そしてさらに発掘調査現場の担当職員は、おそらく一人が基本で、数名単位でも同じくその担当職員



によって、あらゆる場面がことごとく主観的な判断で実施されている。しかし突き詰めていくとその理由は、実はよくわからない。なんとなく、昔からそうしているし、先輩たちもこうなっていたからこうしないとまずい。とにかくわからないから写真を撮る、図面をとる。そういう話がずっとつきまとっている。そして取得した各種データは、不用意に保管・分類されていく。基本的には標準化できていないものですから、こうしたデータは客観的な資料としての定点がない宙に浮いた資料群であり、とても使えない。これが現在の考古学、あるいは埋蔵文化財のデータではないのか、と思います。我々の先輩方もデジタル化に挑んで失敗した理由はここにある。ばらばらで雑多な、とりあえずのデータで、定点・起点がない。ですから、考古学、あるいは埋蔵文化財に携わる研究者の方々は、そう言った個々個別のばらばらのデータを改めて、一つ一つ自分なりに消化して、評価しなければならなくなります。例えば遺構一覧表の竪穴建物の大きさ、どこからどのように測ったモノなのかという起点が示されていない。統一されてもいない。加えて mm、cm なのか m 単位なのかさえ、標準化されていない。統計処理一つとってもいちいち補正しないといけない。時期設定はさらに曖昧となり、全国的な時間軸も作り得ていない。全て見直さないとデータは使えない、こうしたところに問題がある。現実の現場は時間との戦いで、本当にみなさん一所懸命やってみえる、発掘調査。僕も 30 年間一所懸命やってきたつもりですが、振り返るとあのデータはなんの役に立っているのだろうか、ふと思います。膨大なお金と膨大な時間が浪費されただけなのか、と疑問を持ちます。

ところで私の最後に担当した現場は、愛知県清須市の朝日遺跡でした。高速道路が交差するインターチェンジのど真ん中、二重三重にも道路が重なり、その間にさらに橋脚を作るという非常に難しい工事です。発掘調査の考古学担当者だけでは到底無理な現場管理です。工事工法・安全管理とか全て、専門性の高い技術やスキルを持つ集団がいないとできない状態の中、強く感じました。発掘調査は一体なんのためなのか。これで発見した遺構や遺物はどうすれば地域の歴史に還元できていくのか。莫大なお金が投資される傍らで、コツコツと同じような調査をすることが、果たして必要であり大切なことなのかどうかです。さらに地層や遺構が細かく分断され、それを元に時空間を復元する方法はどうしたら良いか。その中で考えたのが、まずは全てを標準化しなければならないという現実的な結論でした。地層から標準層位を組み立て、コード化され

\* 下部にある註は吉田泰幸による

**愛知県清須市の朝日遺跡** 愛知県清須市と名古屋  
市西区にまたがる弥生時代の集落遺跡。環濠中の  
逆茂木などが著名で、出土品の多くが重要文化財

に指定されている。隣接する貝殻山貝塚が国史跡  
に指定されており、その名を冠した貝殻山貝塚資  
料館に朝日遺跡の多くの資料が展示されている。

たデータを決められた内容に即して日常的にリアルタイムにアーカイヴしていく。考古学のみなさんに標準化しましょうねと言うと、まず抵抗感があるはず。なんとというか、土器型式を統一するとか、あるいは名称を統一するとか、あるいは調査の仕方を全て統一するとか、研究レベルでの標準を想定してしまいます。そうではなく、まず現場で取得される全てのデータのコードだけを統一しましょう。考古学調査のデジタルワークフローを作成し、そのコアデータだけを、まずは標準化しましょう。全ての雑多な膨大な調査データの中の、基礎データをターゲットにする。どこの遺跡でも、同じように取得されるデータだけを統一しましょうね、という話を進めてきました。これならできるだろうと。コアデータというのは基本的には、その遺跡とかその遺構を評価するための最低限の必要なデータのことです。その遺跡、その遺物、その遺構、を評価するための最低限のデータ、このコアデータだけを統一しましょう。そこからそれをベースにしながら、様々な方が研究に応用すればいい。ごく自然な話ではなかろうかと思ったのです。しかしながら実はそれはことごとく失敗しております。なぜでしょう。質問ですが、石川県の弥生時代の竪穴建物は、発掘調査成果をもとにすると現在では何軒ありますか、わかる人。（無言の時間がしばし流れる）多分誰も……。もっと言えば、写真に掲載された遺物、報告書を見て、瞬時にどこから、どのように、どの遺構やその組み合わせの中で出土したのか、これもなかなか分かりにくいです。こんなことすらわからないのに、どうして地域研究に考古学データが活用できるのだろうか。膨大な時間と膨大な費用をかけたデータは一体どこに行っちゃっているの。そしてデータそのものを素直に公開することなく、なんでそんなに抱え込む必要があるの。それらが不思議で不思議でしょうがない。

## 電子納品ガイドライン

そこで愛知県埋蔵文化財センターでは、とりあえず、電子納品ガイドラインというのを作りました。これは現在も継続中だと思います。何をしようとしたのかというと、誠に単純です。「コアデータを統一した」ということです。考古学のワークフローを全てデジタルで。現場から出てきたデータをどういう場所に、どういう目的でどのようなフォルダに格納するのか、ということを単に統一だけです。その内容まで踏み込んで統一していません。言ってみればフレームだけを統一して、中はある程度ぼやかして、デジタルデータだけで成果納品を実施するというものです。実は愛知埋文の地下研究室には電子納品ガイドラインがぶら下げてあります。民間支援会社の皆さんとも、私どもはタッグを組んで調査を実施していますけれども、全ての愛知埋文の遺跡は、どんな遺跡であろうとも、最終的に電子データとして、このガイドラインに沿って納品・提

出しているだけで、紙媒体は不要です。というところまで行っています。

さらに注目していただきたいのは、そこで出てきたデータを愛知県埋蔵文化財センターでは、情報センターという部署にて一元管理しておりまして、ある程度公開しています。そこにあるデータは様々なデータですが、コアデータが統一されていますので、活用方法が一気にアップしました。例えばある遺跡で出土した石鏃が何点あるのかとか、あるいはこの写真はどこにあり、どのような属性を持っているのかとか、この遺物はどこで出土し、その時の状況はどうであったのか、といった具体的なデータが瞬時に見える化できます。また縄文土器はどういう遺跡で出土しているのかというのは簡単に瞬時に、誰でも地下研究室に入れば検索可能です。さらに加えて、朝日遺跡の中で骨角器、獣骨とか鹿の骨で作った簪とか、そういうものを引っ張り出してきて、どこから出ていますか、と調べると、グーグルマップ上に略図が出てきて、調査区の中に点を落とすこともできます。今はさらに進化していると思います。

一個一個の土器に属性が付いていまして、三次元の位置情報である XYZ の属性と、それにどういうものがあるのかということを調査段階の写真などがくっついている。それをサーバーが引き出してきて、指定された地図にプロットする。分布図を作ってくれるのです。調査区図面を下地にして、プロットさせることもできます。一つの調査区の中で、縄文土器はこの辺に出てくるとか、弥生土器はこの辺に出てくるとか、弥生のなんとか型式がこの辺にまとまるとか、ということも可能です。要するにここまでくると、報告書はもうこれでいいんじゃないかと思うのです。どうでしょうか。

考古学データは様々なホームページで公開されていますが、僕から言わせれば、それはただ情報を垂れ流しているだけであって、つまり、担当者が自分で整理して、それを良しと思って、ホームページにただ上げているだけ。でもそれは本当に、市民にとって、県民にとって国民にとって、何の意味になるのかさっぱりわからない。また面白くもない。研究者にとっても同様に困った難しい情報にすぎません。情報とは何なのかを今一度考えた方がいい。もう一つは、あまりにも考古学の情報は敷居が高すぎるという風潮がある。この写真は使ってはいかん、このデータは使用にあたっては許可が必要で、このデータはちょっと待て、報告書が出るまで待てとか、これを使うためには許可願いがいるとか、それはおかしいだろうと思いませんか。これらの情報は、そのほとんどが公のお金に基づいて調査されたものです。ある程度の著作権は必要かも知れませんが、基本は公開して、活用して、その地域のために役立ってこそ情報なのだと私は思います。抱え込み、奇妙な理由を付けて公開を阻む、ちょっと勘違いされているのではないかと思います。つまるところ現状の考古学情報、埋蔵文化財情報とは何者なのかといえば、雑多で無秩序で不可解なアナログ



ベースの単なる資料の塊でしかなく、活用性は極めて低いと思っています。

私も 30 年ほどこの業界にいました。結果、まことに情けなくて、埋蔵文化財センターの仕事で生活させていただいて、本当にありがたく思っていますが、反面、今までやってきたものはこれからどうなっていくのかと思うと、恐ろしくなります。遺物収蔵庫をいろんな人に見学してもらうとよく言われるフレーズは、君たち、こんなカケラみたいなものを集めて、一体何をしたいのか。このお金は公のお金だけど、お前ら何をやっているのかとよく言われました。おそらく基層として今も、そういう風潮が残っていると思います。このような発言をされる人は、考古学資料がどういうものなのかよく理解されていないという側面と、同様に私たちも実はよくわかってないのではないかと、思っています。何となく慣習的にそうやってきた。原点に立ち戻り、良く考えてみる必要があります。

疲れ果てて、考古学データの標準化は諦めました。もうやめます。今の体制を変革して標準化を進めるのは不可能ではないのかと、思っています。残念です。ではどうしたらいいか。次のお話に進みます。

## NPO 法人 ニワ里ねっと

私は NPO 法人を 5 年前に立ち上げました。これ、起業です。正規の職員も雇っています。従業員を合わせますと、16 人の組織です。給料支払いだけでもかなり厳しい額になり、NPO の支出の大半が人件費です。最初に、その出発点のお話です。場面は愛知県犬山市にあります青塚古墳史跡公園。青塚古墳の上で、清掃活動をする但也有ありますが、実は普段ここに入ってはいけない、墳丘に登れない古墳なのです。史跡整備をして、古墳の上に登れないのは大変珍しい公園かと思えます。この近くに大縣神社という式内社がありまして、この青塚古墳の墳丘そのものが現在でも神社の土地です。ですから、神社にゆかりのある神様が祀られている場所に、立ち入ってはいけません、登ってはいけません、という事になっています。ただし教育的観点と学術的観点、さらに管理上最低限の場合は特別許可が出ます。ここでは清掃活動の場合をご紹介します。これは地域の皆さんと実施している行事です。古墳の周りにいくつかの集落がありまして、こちらからお声をかけさせていただき、ボランティアで清掃活動を年に何回かやってもらっています。概ね 50 ～ 60 人くらいの方が参加していただいています。見ていただくと、機械を使っていません。全部手作業でやっています。これはこだわりでありまして、昔の景観に復元しようという趣旨で、外来的な草を一つ一つ抜いているのです。史跡整備の段階で小熊笹を優先して墳丘に植えてしまった。しかしこの地にあった従来の草が力を盛り返して墳丘上を覆い尽くそうとしています。墳丘が前の形に戻りたいのです。なぜ小熊笹であったのかは整備段階の指示によるもののようですが、長年の月

日が、そんな一律の植生環境があまり意味のないことであったという結論が見えてきます。この草を抜いてください、特定の草だけを抜いてくださいということで、手で抜いてもらっています。非常に時間がかかります。全体を我々がイメージするような草花の山にするには、おそらく後10年ぐらいかかるかもしれませんが、それを根気よくやり続けたいと思っています。

ここの史跡公園を管理運営する母体が必要になりました。そこで紆余曲折ありましたが、結果的に私どもが犬山市へのプロポーザルを経て、この公園の運営に携わるようになったのです。まずは史跡公園を運営する母体としてNPOを立ち上げた事になります。史跡公園そのものはもう15～16年経っています。市の直営からNPOへ運営を移行しました。ここに至るまでには様々な問題がありました。僕もある程度は関与してきたつもりですが、公園管理という現場に立つと、全然違った面が現実味を帯びてきます。そして我々はこの公園の運営だけではなく、ここを起点にNPO活動をしてみようという方向に動いていきました。何をやっているかということ、まずは史跡公園の管理・運営です。本当に小さなガイダンス施設です。古墳公園の横に、ぼつっとあるだけのガイダンス施設。普通ならば、リタイアしたおじさんが一人で留守番しているぐらいの小さな施設です。小さな小さな資料館で、遺物もちょっと展示できる程度、そして研修室があるぐらいのものです。無人化され、ただトイレだけの施設とほとんど変わりがない。そこに我々はあえて専門の学芸員を2人、それから公園管理の人を5人、芝生公園も非常に広いですから、日常的に草を管理するだけでも大変です。またガイダンスの窓口業務の人もお願ひして、交代できただくようにしています。こんな小さなガイダンス施設に、こんなにたくさんが人がいる、不思議な空間ができています。それは一つのこだわりです。史跡公園とはそこにいる人、働いている人、周囲の住民の人、そして公園に遊びに来るご近所の方や子供たち。それが一体となって意味をなす。そうした空間を作ることが重要だと思っています。

## 文化遺産の見える街づくり

さて我々のNPOの旗印は「文化遺産の見える街づくり」です。キーワードは街づくりです。

これを受けてまず始めたのは「文化遺産の悉皆調査」です。これは国へ補助金を申請し、3年ほど実施しました。犬山地域のありとあらゆる文化遺産をかたっぱしから調べる。またオーラルヒストリーといって、要するに聞き込み、おじいちゃんおばあちゃんの話をして聞いています。これは非常に大切だと思いました。ある時、犬山市の中でも人がほとんどいないような集落で悉皆調査をやった時に、90歳ぐらいの古老に出会いました。その人が「よく来てく

## その街の 文化遺産物語



れた」、「待っていたよ」と言っていただきました。そして滔々とその地域のことを話されました。涙が出るほど嬉しかったです。実は地域にはそういう人がいっぱいいらっしゃる。でもあの人、次にうかがう時には、いらっしゃらないかもしれない。今しかない。今、資料・記録を残さないと次はない、

と痛感しました。

次に犬山には桃太郎神社というのがございまして、そこに奇妙奇天烈なコンクリート像がたくさんあります。浅野祥雲という人をご存知でしょうか。昭和の後半に活躍したコンクリート像の作家です。その人の作品群が残されています。近年ネットでも話題になっています。今の時代がほとんど垣間見られなくなった新たな文化遺産を甦らせようとしています。面白い現象です。

こうした多様な文化遺産をアーカイヴして、「犬山たび」というコンテンツを作りました。スマートフォンを使ったコンテンツ作り、キャラクターを作ったりして、旅をするという物語です。さらに犬山市域を七つに区分した「犬山たび」というリーフレットを作成しました。こちらはアナログです。文化遺産を「見える化」する具体的な事業だと思っています。

それから、私がこだわっているのは、市町村合併で、行政単位が大きくなっています。そこで何が起きているかというと、実は小さな村とか小さな街のバブル期前後に作った資料館、博物館がことごとく絶滅危惧種になりつつあります。合併して大きな市になったから、博物館は市に一つでいいだろう、小さいのは必要ない、という話になってきましたし、既存の古い博物館・資料館はリニューアルする時期ですが、その資金がない。私はそれを手作りで再生したいと考えています。ある資料館では、ジオラマを手作りで作っています。NPOをやっている本当に面白いのは、建築関係の人とか、造園屋さんとか、今までほとんど関わることがない業種の方々とお友達になれるということです。そして凄いのは、そういう人が無償で自分のスキルをNPO事業に提供してくれます。本当に頭が下がります。

ところで我々は文化遺産カード事業を実施しています。これは文化遺産専用

**文化遺産カード** ニワ里ねっとの主な活動場所である犬山市だけでなく、岐阜県、福井県、新潟県の一部でも展開している。

URL: <http://herica.net> (2017年2月7日にアクセス)

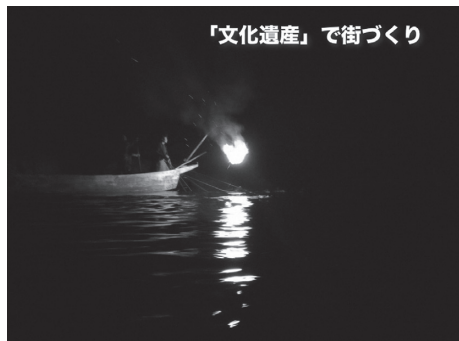


にカードを作成し、その場所に行ったら無料でもらえるという仕組みです。現在、トレーディングカード規格サイズのカードを作成し配置しています。この発想はダムカードにあります。ダムに行くとそのカードがもらえる。史跡に行くとカードがもらえる。しかしカードをくださいと行っても史跡には誰もいませんので、どうするかというと、写真を撮ってもらって、カード配布場所に行き、現場に行ったと写真を提示してもらって、無償で文化遺産カードがもらえるという仕組みを作りました。今のところ、全国で150箇所ぐらいカードを用意していただいています。今まで文化財に全く無縁であった人々に、少しでも関心を持っていただけるような活動になることを祈っています。

以上、当NPOが実施していることは、文化遺産が息づく現実の地域社会へ入り込んで、その地域の人たちと一緒に何かをすること。地域に溶け込み一体化すること、それが一番大事ではないかと思っています。教育委員会の担当者さんとか大学関係で文化遺産を使って事業を行っています、本当に地域の人たちと一緒に目線でやっているのかと思いたくなります。青塚古墳の史跡整備にも、いろんな方々が関与していました。学者の先生方も参加する場合がありますけれども、史跡公園がいざ完成しますと、いつの間にか、みなさんいなくなってしまいます。じゃあその後、誰がその史跡を動かして行くのか。困ってしまうのは市町村の直接担当者と地元の人たちです。そうではなくて、その後の持続可能な運営まで考えて、地元と地域の人たちと一緒にどうしたらいいのか、というところまで踏み込んだやり方をしないとまずいのではないかと思います。

## 文化遺産学センター

第三幕、文化遺産学センターという話です。埋蔵文化財センターはもう時代にそぐわない組織となった事は明らかです。高度経済成長期の遺産であり、本来の目的はすでに終わっている。ではどういう形に変えて行ったらいいかというと、一つには文化遺産学センターという仕組みが良いかもしれない、という



提案です。これはここ数年前から複数の先生方が議論してみえる話でして、僕もこの方向性がとりあえず良いかと思っています。

ただし僕のキーワードは、「街づくり」です。ここが少し違っていてもかもしれません。これまでの埋蔵文化財センターには、街づくりという視点やその思想がほとん

## 文化遺産学センター



どないと言って良いかと思います。どちらかと言うと学術性のみが強調されすぎて、その情報の利用・活用はどうだろうか。また提示する情報がその地域に根ざしたものでもない、通り一辺倒の極めて狭い視点からだけの歴史事項の垂れ流し。だから市民から見放される。

文化財の情報は何のためにあるのかと。何のためにあるのでしょうか。この問いかけの答えは、通常は地域の歴史を解明するためとか、もったいぶった歴史的評価が一般的だったのではないだろうか。あなたたち発掘調査をしているのだけれども、それが何のためになるのか、と聞かれてこの遺跡は重要でこの地域のために・・・とか適当なことを言っているのだと思います。だがそれを突き詰めて行くと、どこにたどり着くか。僕は最終的には「街づくり」にあるのではないかと考えています。そうすると、具体的な現在の街づくりのために、今やっている発掘調査のデータがとても重要で必要なんだ、それを使ってこういうことができますよ、またこうした評価から地域の街づくりをこうしたらどうか、というところまで踏み込んでお話しすることによって、市民・住民も、それならば埋蔵文化財の発掘調査の意味も何となくわかっていただけるのではないかと感じています。文化財情報は街づくりに生かすことができるものです。

こうした視点をベースに文化資源、文化遺産学センターを立ち上げるべきではないのかと考えたい。ほぼ二つの方向性があります。一つは文化財・文化遺産研究を通じて、多様な研究者と、諸科学と融合して新しい方向を目指す、これはよく言われていることです。もうひとつは、地域社会と相互交渉して、具体的な生活の場面を設定して行く。僕はどちらかというところこちらの方に軸足を置いた、文化資源・文化遺産学センターの方がいいのではないかと考えています。前者に重点を置きますと、既存の民俗学とか考古学、自然科学とか建築学というところに立脚して俯瞰することに徹してしまいますので、言ってみれば多様な雑多な学問の寄せ集め的で終始する。だからむしろ後者を軸に作り上げた方がいいのでは、と思っています。あくまで文化遺産学センターは諸学の寄せ集めだけになってはいけない。それを回避するためには、現場に行ってその地域の中に溶け込みながら、その地域に今まである多様な歴史・文化遺産、長い長い前史、残された記録・伝承・物語などをいろんな方々と一緒に話しながら、この地域の固有のストーリーを導き出していく。既存の学問の枠を取っ払い、歴史に寄り添い、地域の地質・地形・素材に目を向け、先人の英知に活路

を見出し、具体的なイメージを作り上げていく事が必要ではないかと思います。それはもちろん「街づくり」という視点を基軸としてです。難しいかもしれませんが。埋蔵文化財もその一翼を担う事が出来る面白い学問である事に変わりありません。いろんな方法を探って行く必要があると思います。

新潟県十日町市に国宝の火焰土器が見つかった笹山遺跡があります。そこで毎年、笹山じょうもん市という催しが、NPO・市民を巻き込んで一年に一回行われています。私も何回か参加させていただいて、史跡公園の活用を含めて勉強させていただきました。縄文の服を着て、ここで発掘調査された遺物を説明している学芸員さん。縄文土器を手にとってもいいよと、身近に説明している。地域のお祭りの一コマとして。

それから、遺物は美しいということで、岐阜県美濃加茂市の博物館で取り組んでいることはとても面白いです。現代彫刻をやっている人が、遺跡から出てきた本物の石鏃を基に展示をイメージして、そのままディスプレイをする。これもちっと前の考古学者が見ると、「えー」と顔を強張らせるでしょう。これはこれでまた一つの方法なのかと思います。おそらくみなさんも様々な方法で遺物展示に努力されていると思います。

ユニバーサルデザイン、さわってもよくて、感じてください。いいですね。考古遺物は非常に面白い。時空を超えた奇妙なイメージを簡単に作り上げる事が出来るアイテムです。さらに個別で地域性が非常に豊かですので、ものすごく面白い。地域丸出しです。それをどのようにして見せていくかということも、いろんな職種の人たちと考えていく、面白いことになるのではないかなと思います。文化遺産学センターとして。

## NPO セクターの役割

四つ目、最後の話です。埋蔵文化財センターを直ちに文化遺産学センターに持っていかなきゃだめだと思っています。つまり、考古学的な発掘調査だけをやる部署は、すでに多様化されており、一部の特別な組織だけのものではない。またそうであってはダメなのです。特に技術革新が激しいものですから、公立の組織ではとてもそれに追いついて対応できない。置いてきぼりの古いシステムにしがみつくとになってしまいます。専門性の高い内容は、むしろ民間会社側にお任せ、支援をお願いし、発掘調査全体のフレームを担いながら、加えて民俗学とか建築とか自然科学とかを視野においた、デザインを担当する部署も含めて広い範囲で、地域の文化遺産を考えていく。情報をアーカイブしていく。そしてどう次の世代に繋げていくか、というセンターになっていたかどうかと考えています。キーワードは持続可能な、地域の街づくり、人づくりのために尽力する組織体。そんな志向性を持つモノに変わっていくのが良いのでは



ないかと思います。

仕組みとして NPO セクターは一考に値すると考えます。第一セクターと言われているのは国とか地方公共団体が経営する企業、という役所です。第二セクターは私企業、第三セクターはそのほか第三の方法による運営ということです。公と民間、その間が第三セク

ターですが、実は第三セクターにも二つありまして、一つは市民団体とか非営利団体、その二は国や公共団体と民間との共同で出資する企業体で、日本の第三セクターの多くは鉄道経営によく見かけられるように、特に後者が多いようです。しかし世界的に見れば第三セクターといったら前者の方、市民団体とか非営利団体を指すようです。私はこの本来の第三セクターを NPO セクターと位置付けています。

それで、何をするかというと、例えば考古資料を様々な形でデザイン化する。それを街そのもののデザインに生かしていく、そういうような提案や街づくりの仕組みに参画する。しつこいようですが、キーワードは街づくりです。地域を代表するお祭りをどのようなかたちで街づくりに生かしていくかというのは、色々な取り組みがあると思います。こういうところにも、我々が関与していく余地がいっぱいあります。歴史・文化・民俗文化遺産と一緒に、街づくりの一環としてどのように継承していくのか、知恵をいっぱい出していくことに大いに参画する必要があります。埋蔵文化財情報も例外ではなく、興味深い提案も出来るはずです。

ただ、そこには協働という思想が必要です。協働というと勘違いしている人がいまして、共に一緒にやればいい、役所と地域の人、第三セクター等々が一緒に何かをやしましょう。そうなのですが、実はそこに落とし穴がある。本当の協働はあくまで、平等です。この一点を忘れると崩壊します。どうしても補助金、助成金頼りになる傾向がありますが、するとお金を出す役所側などがどうしても上位、目下す視線になってしまう。それは協働ではない。全てが同じ目線で役所も民間も NPO も全て同じ目線で、一つのミッションを行っていく、これが重要です。そうは言っても、補助金・助成金をこの視点に沿ってどのように扱うのかまだ僕にもよくわかりません。なかなか難しい、どうしても上から目線になってしまいます。一緒に地域を調査して一緒に街づくりのためのデータを見つけていく、そしてこの地域にとって地域を評価するのに必要最低限の情報、つまりコアデータを見つけていくことになれば素晴らしい。

## 最後に

「考えよう、まいぶん」。私はこういう風に思います。地域を愛し、そこを誇りに思い、そこに集まる人の笑顔に出会いたいと思う、そういうことのために「まいぶん」を使う。どうすればいいのか、それは街の中に踏み込んで行く。今までは遺跡の発掘調査をするために、市町村に何ヶ月か行って、終わったらさよなら、時に現地説明会も開催するかもしれませんが、でもその直後から、さよならといってその後は一切その街に関与しない。それではそのデータは生きていきません。その街の中に飛び込んで行く必要がある。そのためには現状の「まいぶん」という組織体系では難しい。

最後に僕の問いかけです。出発点は「郡」的規模という概念です。古代邇波の里・文化遺産ネットワークは、旧郡を基盤にしています。「郡」というのは、今日的には絶滅危惧種です。石川県にも郡とその街というのはいくつぐらい残っているのでしょうか。くわしくはわかりませんが、愛知県でもほとんどなくなってきました。しかし、「郡」という規模は日本列島の西東でちょっと違うようですが、例えば東海地方・中部ですと、郡というのは自然発生的にまとまった、ある領域を基盤にしていることは容易に推察できます。例えば考古学では僕は地域の土器を扱っていますが、土器の様式の親密性とは、ほぼ郡という単位でまとまります。実によくマッチしています。ということは婚姻関係を結ぶ範囲とか、方言とかが同じレベル。そのまとまりが郡という規模に近い。そう思いまして、私は郡というのを地域性豊かな文化資源・文化遺産を調べる、一つの起点にしたらどうかと考えています。郡という規模の特異性を基礎にして、個性的な文化や街づくりを志向する。

それからもうひとつは、部族社会を復権させようと主張しています。ちょっと引いちゃうかもしれませんが、方言とか言葉、風俗風習を共にするのが部族社会です。昔は日本列島の中に様々な特異な風俗風習があった。村や里の景観もその地域の素材により、風土に従い独特の景観を作ってきた。それを今は失

くしてしまった。方言・言葉も一律に失くしてしまった。どこへ行っても同じ景観で同じ町なみ。面白くもない。そうではなくて、その地域の風土にあった仕来りの意味を継承し、そしてその心を大事にする。一年のサイクル、お祭りとか、おもてなしの仕方、人との対応の仕方、方言、そういうのをもう一回、

### 考えようまいぶん・・

そこを愛し  
そこを誇りに思い  
そこに集う人々の笑  
顔に出会い

自由にして機能する  
時空域を目指せ



強く意識して、それぞれの地域社会（ここでは部族社会）を復権させる。日本  
共通言語や景観は、もうやめた方がいい、と考えています。

以上を踏まえての問いかけは・・・。「あなたはどこの国津神の民ですか」。

私のいつもの問いかけです。郡の民であるという意識を持ってもらいたい  
ということです。僕は、瀬波の民でございます。ありがとうございました。